

現代青年における心理的特徴と生活行動の関連について

心理学系
堀 洋 道
心理学研究科
吉 田 富二雄

我々は、先の報告（堀・吉田1980）において、現代青年、特に大都市高校生をとりまく家庭環境の問題を扱い、親子関係を中心とする家庭の在り方が、現代青年の心理特性や社会的意識・態度とどのような関連をもつかを明らかにしようとした。その結果、「拒否」的家庭環境や「干渉」的家庭環境のもつ問題性が、精神的疲労・孤独・トランスの欠如等のネガティブな心理特性、家出・退学・自殺・暴力などの様々の問題行動傾向（念慮）、そして「愛がなくとも性行為があつてよい」という一見「ラディカル」な性意識と結びつく形で浮彫りにされ、あらためて家庭環境の重要性が認識された。

さて前稿では、認知された家庭環境と心理特性・問題行動念慮・社会観・性意識観のつながりという意識レベルの問題が分析対象であった。本稿では角度をかえて、生活時間・生活行動という日常的行動に眼を転じ、具体的な行動レベルの問題から現代青年にアプローチしてみたい。通常、問題行動念慮なり性意識観なりの意識レベルの問題が具体的な行動レベルの問題に直接つながることは少ない。主観性あるいは観念性が最も肥大化し、一方、具体的な行動が強い現実制約化にある高校生ではなおさら両者の乖離は大きい。前者は社会意識状況を鋭敏に反映しながらも、後者はあくまで両親や教師の保護あるいは制約下にあるからである。逆にいえば、ひとつの具体的な行動のうちにある特定の意識を見出すことは難しい。しかし、ある共通の心理状況なら見出しうるかもしれない。以下、本稿で扱う問題は次の通りである。

(1)現代青年の心理状況を探る為に設定された心理変数の相互関係を検討し、整理すること。

(2)心理特性の面から日常生活行動の特徴を検討すること。

なお、本稿は、前稿と同様に昭和53年度東京都青少年調査を基に、必要に応じて再分析したデータに依っている。

方 法

1. 調査方法

(1)調査地域・調査対象・標本抽出、(2)調査方法、(3)回収標本の基本的属性、(4)調査内容の全体、等については前回の報告を参照されたい。

2. 心理的特徴の測定

本調査では、(1)現代の環境の特質がどのような心理的特徴と結びつきやすいか、(2)家出・自殺・登校拒否・家庭内暴力のうらに、どのような心理的機制が働いているのか、これらの点を明らかにするという基本的意図に基づき10個の心理変数を設定した。心理変数の設定にあたっては、臨床専門家や現場教師からの意見聴取やその他の資料に基づき、心理学者を構成員とする調査準備研究会でくり返し討議を重ね、「Yes」「No」の2件法による28の質問項目を作成した。厳密な意味での心理尺度の作成が目的ではなく、現代青少年の心理状況を上述の基本的意図から出来る限りひろいあげること为目标としたものである。従って、以後、心理尺度とはよばず心理変数ということにする。

各心理変数の内容と質問項目は表1に示す。各変数得点は、該当質問項目に「ハイ」と答えれば1点として加算された。従って、例えば「自己顕示」は0～2点、「精神的疲労」は0～8点に分布することになる。以下、各心理変数について簡単にふれておく。

(1)自己顕示…目立ちたい、人をアツといわせるようなことをしたいという欲求。自己主張というより、周囲からの抑圧や無視への反動としての意味をもち、強すぎる欲求は問題行動につながる。

(2)孤独感…自分をわかってくれる人がいない、一人ぼっちであるなど、自分は周囲から孤立しているという意識で、人間関係の希薄さ、連帯感の欠如なども関係があり、現実からの逃避、その極としての自殺などと関係する。

(3)甘え…他人への依存心、親の配慮を当然だと思ふような未成熟な認識の仕方。

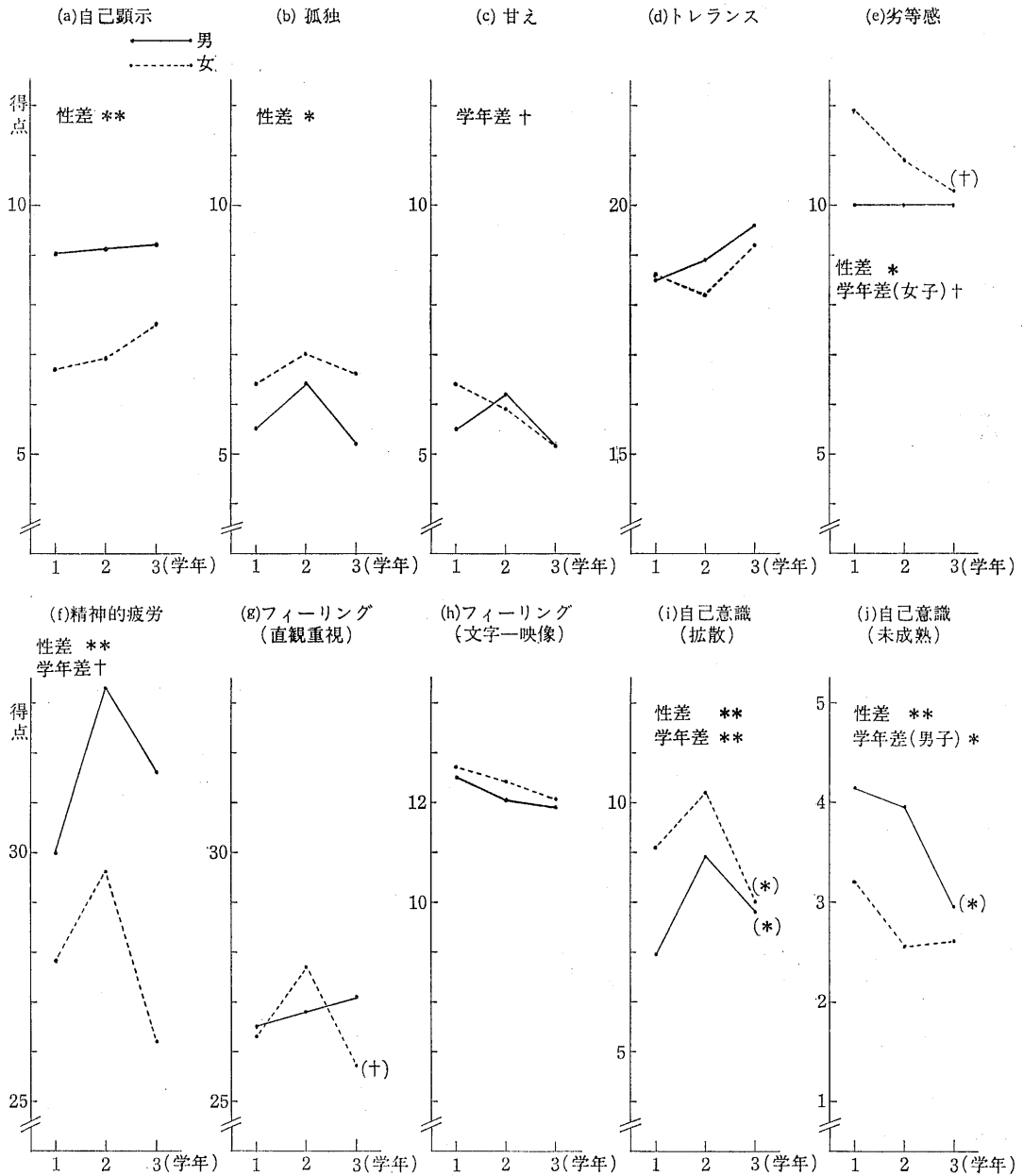
(4)トランス（耐性）…イヤなことでもぐっと耐えるという心理特性。これが十分でない自分の欲求を制御

表1 各心理変数の項目内容

	全体	男	女	
1. 自己顯示				
9. 何かをする時に、周りを見ている人が多いとハリキル方だ……	35.7	40.3	30.6	**
17. 何か変ったことをして人をアッといわせたい気持が強い	45.6	50.6	40.2	**
2. 孤独				
4. 自分のことを誰もわかってくれないと思う	20.4	20.3	20.5	
17. 大勢の中にも自分は1人ぼっちだと思うことがある	41.2	36.8	46.0	**
3. 甘え				
2. 自分が勉強している時に親が気をつかうのは当然である	29.8	29.1	30.4	
28. 自分でできることでも他の人に手伝ってもらおう方である	27.7	27.7	28.3	
4. トランス (耐性)				
6. イヤなことがあってもその場ではジッと耐える方だ	70.2	70.4	70.0	
13. 言いたいことをがまんしても、他人の意見を聞くことができる	68.9	68.9	69.0	
㉔. ちょっとしたことでもひどく怒ってしまうことがある (NO)	48.8	50.1	47.4	
5. 劣等感				
8. 失敗しないかいつも心配である	47.1	47.1	47.4	
12. 自分をダメな人間だと思うことがしばしばある	57.5	52.8	62.7	**
6. 精神的疲労				
7. 自分に直接関係すること以外は関心がもてない	27.5	30.7	24.0	*
16. 物事に感動することはめったにない	16.8	21.6	11.6	**
21. 何をするにも自分からはすすんでする気にならない	24.9	26.6	23.1	
14. 毎日が単調でつまらない感じがする	51.9	54.5	49.1	
15. いつも何となくだるい感じがする	47.7	50.7	44.3	*
19. 毎日あれこれやっているのに退屈な感じがする	41.0	41.7	40.2	
23. 何となく神経がすりへった感じだ	39.1	38.1	40.2	
25. 何かを考えようとしても、考えがまとまらないことが多い	48.9	51.4	46.2	
7. フィーリング (直観重視)				
1. 物事は感覚的にわかることが大切だと思う	79.1	80.3	77.8	
5. 直観的にわかったことを大事にしたい	78.2	78.9	77.5	
㉓. 物事はこまかい所にこだわらずおおよその事がわかれば良いと思う (NO)	54.8	56.1	53.2	
㉑. 物事はたいてい全体としてわかってしまう (NO)	54.8	52.5	57.2	
8. フィーリング (文字—映像)				
24. 小説は原作を読むよりテレビドラマで見る方が好きだ	49.6	50.3	48.8	
㉒. イラスト等で説明されるよりも文章できちんと説明される方が好きだ (NO)	72.8	71.1	74.6	
9. 自己意識 (拡散)				
10. 今の自分は本当の自分でないような気がするがある	44.1	41.9	46.5	
20. 現在一番したいことが何なのか自分でもわからない	40.5	37.0	44.3	*
10. 自己意識 (未成熟)				
27. 自分がどんな人間であるか、あまり考えたことがない	32.9	37.4	28.0	**

注 数字は肯定率、ただし、番号に○印のついた項目は「NO」が心理的特性に該当し、その割合を示す。

*は5%水準、**は1%水準における男女間の有意差を示す (χ^2 検定)



注) ** P < .01, * P < .05, + P < .1 (分散分析, 但し(j)自己意識(未成熟)は χ^2 検定)

図1 心理変数の性・学年別平均値 ($\times 10^{-1}$)

することができず、困難に遭遇したときに、適切に処理できない。環境に対する主体的要因として重要なものの1つである。

(5)劣等感…自分をダメな人間と思ひ込んだり、失敗しやしないかとびくびくするような傾向。劣等感が強いと自罰的になったり、反動的に激しい行動へ走る危険がある。

(6)精神的疲労…三無主義的傾向・生活の単調感・慢性疲労感・神経消耗感・集中力の欠如などから構成される。肉体的疲労とは異なり、弾力性のない灰色の精神状況。過剰な刺激や多忙さにより追いつてられる感じ、過度の精神的緊張などによってもたらされる。生きる力を低下させたり、現状からの逃避、自閉的傾向へつながる可能性をもち、しらくとは同じでないが関連がある。

(7)フィーリング(直観重視),(映像志向)…これは、本来、フィーリング傾向として考えていたものである。直観重視は、物事を理解するときには感覚的にきっちりわかりたいという態度で、その反対は、大体のことが全体としてわかるというような態度である。映像志向は、物事の理解を映像的、視覚的に行う傾向で、文字・文章志向と対をなすものである。

(8)自己意識(拡散),(未成熟)…これらは自己同一性として考えていたものであるが、目標やしたいことがつかめず、自分が自分であるという安定感がない拡散傾向と、自分がどんな人間かまだ考えたことがないという未成熟な側面とは異なるとして両者を分離した。拡散の側面は精神的疲労にもつながっている。

3. 生活時間・生活行動

青少年の行動的特性を、(A)生活時間、(B)生活行動の2側面から尋ねた。(A)生活時間は、睡眠・勉強等の時間、およびテレビ・ラジオ・新聞の接触時間、そしてマンガ・週刊誌・単行本等の読書数を直接記入させる方法(平均1日当たり何時間、あるいは月に何冊)をとったが、本稿の分析に際しては、各々の分布の特性に基づきカテゴリー化して扱った。(B)生活行動は、(1)家庭(2)学校(3)その他の3領域について、各項目が自分自身にあてはまる場合いくつでも○をつける(マルチ・アンサー)形式で答えさせた。各領域における項目内容は後出の表を参照されたい。

結果と考察

1. 性・学年別にみた心理的特徴

各心理変数の学年別平均得点を男女毎に図1に示す。以下、性、学年差の順にその内容をみていこう。

(1)性差…男子の方が女子より強い傾向を示すものは、自己顕示・精神的疲労・自己意識(未成熟)であり、逆に女子の方が強い傾向を示すものとして、孤独・劣等感

・自己意識(拡散)があげられる。精神的疲労は、無気力・無関心・無感動の三無主義的傾向と、生活の単調感・神経消耗感等から成るが、項目レベルでみると、「自分に直接関係すること以外は関心がもてない」「物事に感動することはめったにない」等の三無的傾向の面で男女差が目立つ(表1)。また「自分がどんな人間かあまり考えたことがない」(自己意識・未成熟)でも男女差は有意であるが、これは三無的傾向だけではなく発達差の現れであろう。一方女子では、「大勢の中にいても自分は1人ぼっちだと思ふことがある」(孤独)「現在、一番したいことが何なのか自分でもわからない」(自己意識・拡散)で男子より10%程度高い肯定率を示している。青年期特有の自己を中心とした観念的傾向が女子においてより強く現れているとともに、社会や家庭の制約が男子より強く、そのため男子より早い時期に自分自身について考え、まよわざるをえない、という状況の現れともみられる。又、「自分をダメな人間だと思ふことがある」(劣等感)も男子より有意に高い肯定率を示しているが、それもこうした事の反映ではないだろうか。

(2)学年差…比較的はっきりした学年差の見出された変数について、その変化のパターンを整理すると以下の通りである。

(a)男子

①学年とともに減少するもの…自己意識(未成熟)、
②2年次で最大になるもの…孤独・甘え・精神的疲労・自己意識(拡散)。

(b)女子

①学年とともに減少するもの…甘え・劣等感・自己意識(未成熟)、
②2年次で最大になるもの…孤独・精神的疲労・自己意識(拡散)。

このように整理してみると、まず第1に、孤独・精神的疲労、そして「今の自分は本当の自分ではないような気がする」「現在一番したいことが何なのか自分でもわからない」(自己意識・拡散)という自己不確定感が、男女とも2年次で最も強くなる点が注目される。更に男子では、「勉強している時に親が気をつかうのは当然」「自分のできることで他人に手伝ってもらおう」(甘え)という自己中心性が最大になり、女子では有意な変化ではないがトランスが最小になるのもこの2年次であり、2年は自我や周囲との関係において不適応感の強い学年だといえよう。

第2に、全般的にみて、学年とともに自己意識が成熟し(自己への関心の増加)、有意な変化ではないが甘えが減り、トランスが増している。また女子の場合、劣等感の減少もみられるが、これらは、自己の客観的評価が可能になるという発達の過程を反映しているためであろう。その他、フィーリング(直観重視)、(文字・映像)では、性・学年とも明確な変化はみられなかった。

表2 カテゴリー・ウェイト表 (心理変数)

(a) 第1軸 ($r=.442$)

	カテゴリー		ウェイト
不適応感小	マイナス(-)領域	自己意識 (拡散) 小	-4.132
		精神的疲労 小	-4.082
		孤独 小	-3.130
		劣等感 小	-2.254
		甘え 小	-1.800
不適応感大	プラス(+)	甘え 大	1.915
		自己意識 (拡散) 大	2.589
		孤独 大	3.367
		精神的疲労 大	3.434
		劣等感 大	4.224

(b) 第2軸 ($r=.357$)

	カテゴリー		ウェイト
成熟	マイナス(-)領域	フィーリング文字 小	-4.118
		甘え 小	-3.374
		自己意識 (未成熟) 小	-3.306
		劣等感 大	-2.135
		孤独 大	-2.110
未成熟	プラス(+)	フィーリング直観重視 小	2.425
		トランス 小	3.415
		甘え 大	3.588
		フィーリング映像 大	6.219
		自己意識 (未成熟) 大	6.744

(c) 第3軸 ($r=.326$)

	カテゴリー		ウェイト
自己顕示性大	マイナス(-)領域	トランス 小	-8.148
		自己顕示 大	-5.384
		自己意識 (未成熟) 小	-2.869
		自己意識 (拡散) 小	-2.496
		甘え 大	-0.970
自己顕示性小	プラス(+)	甘え 小	0.912
		自己意識 (拡散) 大	1.564
		トランス 大	3.876
		自己意識 (未成熟) 大	5.851
		自己顕示 小	7.448

2. 心理変数の構造

本項では、10個の心理変数がどのような特徴をもっているかを数量化Ⅲ類 (パタン分類) によって検討する。前述したように、これらの心理変数は、現代の青少年をとりまく環境から形成されやすい心理的特徴と、一方、様々の青少年の問題行動傾向の両方から推論されたもので、始めから構造があり導き出されたものではない。従ってこれらの心理変数間の関係を調べておく必要がある。そのため、各変数得点の分布に基づき各々の変数を大小2つのカテゴリーに分割し、10心理変数 (アイテム) 20カテゴリーを数量化Ⅲ類の分析に付した。分析の結果得られた、3つの有意軸のカテゴリー・ウェイトは表2(a)~(c)に示されている。以下順に第1軸から第3軸までの内容を検討しよう。

まず第1軸をみると (表2(a))、プラス領域では「劣等感大」「精神的疲労大」「孤独大」など強い不適応感を表わすカテゴリーが高いウェイトを示している。一方マイナス領域では、「自己意識 (拡散) 小」「精神的疲労小」「孤独小」など精神的安定感あるいは適応感を示すカテゴリーのウェイトが高い。それ故、第1軸は「不適応感大小」の軸と呼ぶことにする。

第2軸は、プラス領域で「自己意識 (未成熟) 大」「フィーリング (映像型)」「甘え大」「トランス小」など未成熟な心理特性を示すカテゴリーのウェイトが高く、マイナス領域では「フィーリング (文字型)」「甘え小」「自己意識 (未成熟) 小」など相対的にみて成熟傾向を示すカテゴリーが高いウェイトをもっている。第2軸は「成熟-未成熟」に関する軸と考えられる。最後に第3軸をみると (表2(c))、プラス領域では「自己顕示小」のウェイトが最も高く、続いて「自己意識 (未成熟) 大」「トランス大」が並んでいる。マイナス領域では「トランス小」「自己顕示大」のウェイトが他に比較して最も強くさいている。従って第3軸は「自己顕示性大小」の軸と解釈する。以上整理すると、第1軸「不適応感大小」、第2軸「成熟-未成熟」、第3軸「自己顕示性大小」である。

3. 心理変数と生活時間

睡眠時間・勉強時間・テレビ視聴時間等の生活時間、及び本・雑誌等の接触量に関する回答結果を表3に示す。以下、これらの生活時間と心理変数との関係を心理変数の3つの基本軸を手がかりに検討する。

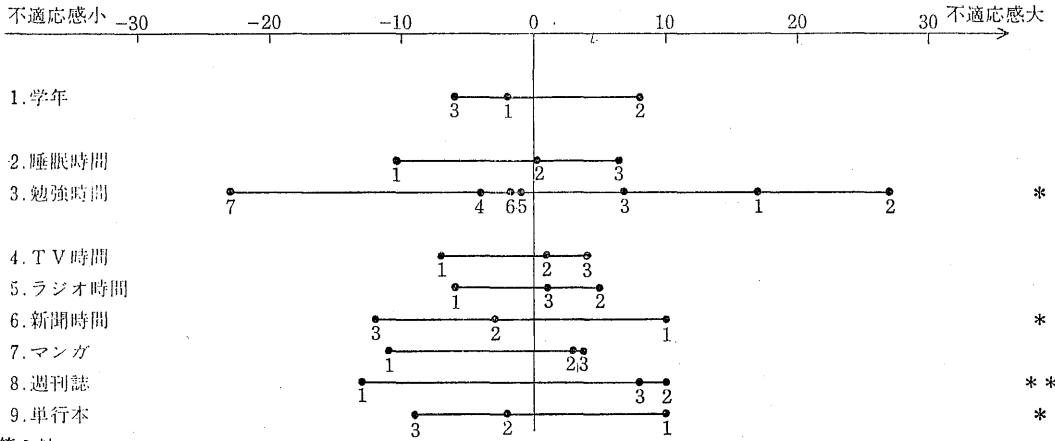
まず第1軸「不適応感大小」との関係のみみよう (図2(a))。有意な差のみられる項目では、勉強時間の少ない者 (30分以内)、新聞や単行本をあまり読まない者、また逆に週刊誌をよく読む者のうちに強い不適応感を抱く者が多い。学年では、2年がより強い不適応感の傾向

表3 生活時間と情報接触量

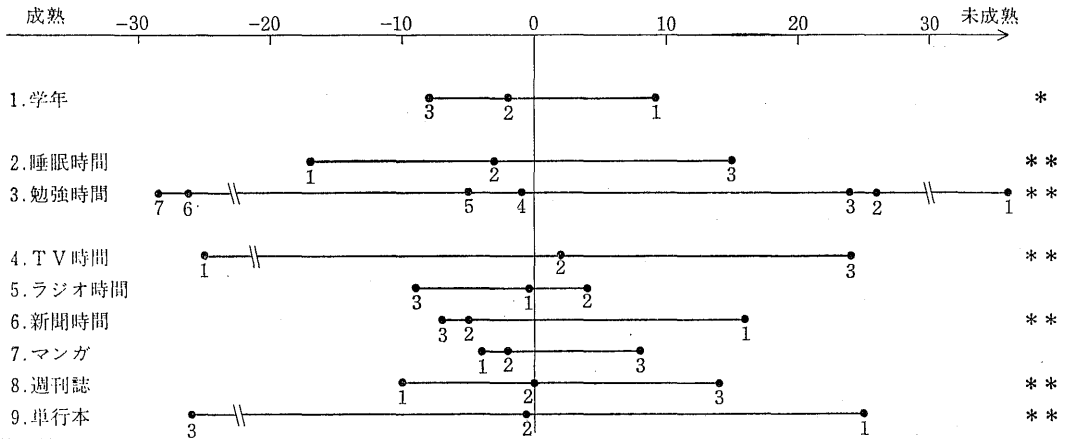
(%)

生 活 時 間		全 体	男	女
睡 眠 時 間	1. 0~360分	22.1	20.0	24.3
	2. 361~449分	44.7	46.8	42.4
	3. 450分以上	33.3	33.2	33.3
勉 強 時 間	1. 0 分	5.2	6.7	3.5
	2. 1~30分	5.0	5.6	4.3
	3. 31~60分	17.8	18.6	17.0
	4. 61~120分	33.1	31.7	34.7
	5. 121~180分	22.4	21.7	23.1
	6. 181~240分	9.0	7.7	10.4
	7. 241分以上	7.5	8.0	7.0
テ レ ビ 視 聴 時 間	1. 0~60分	19.8	19.6	20.0
	2. 61~180分	62.1	62.5	61.6
	3. 181分以上	18.1	17.9	18.3
ラ ジ オ 聴 取 時 間	1. 0 分	41.4	38.5	44.5
	2. 1~120分	42.3	45.6	39.3
	3. 121分以上	16.4	16.5	16.2
新 聞 読 む 時 間	1. 0~14分	33.0	29.3	37.0
	2. 15~44分	56.4	59.6	53.7
	3. 45分以上	10.6	11.8	9.3
1ヶ月に読むマンガ	1. 0 冊	20.5	21.1	19.9
	2. 1~5冊	55.0	48.0	62.7
	3. 6冊以上	24.4	30.8	17.4
1ヶ月に読む週刊誌	1. 0 冊	40.9	86.3	45.9
	2. 1~2冊	29.7	29.6	29.8
	3. 3冊以上	29.5	34.2	24.3
1ヶ月に読む単行本	1. 0 冊	29.7	30.8	28.4
	2. 1, 2冊	46.3	44.3	48.5
	3. 3冊以上	24.0	24.9	23.1

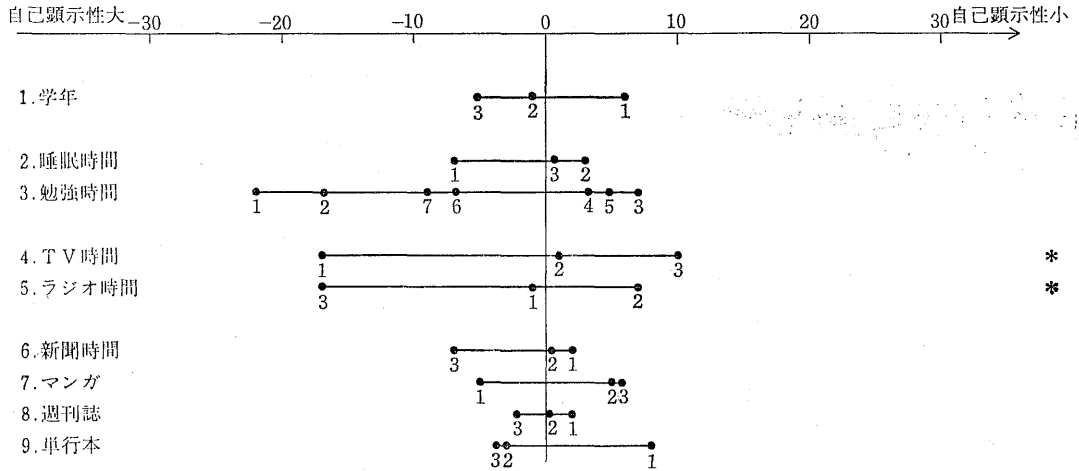
(a)第1軸



(b)第2軸



(c)第3軸



注) *は5%水準, **は1%水準の有意差を示す(分散分析)。

図2 サンプル・スコアの平均値(生活時間)($\times 10^{-2}$)

表4 生活行動

		肯定率 (%)	全体 (男/女)
家 庭	1. 父親とよく話をする	32.6	(35.2/29.8)
	2. 母親とよく話をする	66.3	(57.7/75.7)
	3. 家の仕事や家事をよく手伝う	26.5	(18.2/35.5)
	4. 兄弟姉妹とは仲がよい	43.1	(39.9/46.6)
	5. 家族団らん積極的に加わる	33.8	(26.3/41.9)
	6. 家では自分の部屋に一人であることが多い	30.7	(36.8/24.0)
	7. 近所の家へよく遊びに行く	13.9	(20.2/ 7.0)
	8. わか家へは友人がよく遊びに来る	22.9	(28.0/17.3)
学 校	1. (必修以外の)部活動で文化系に属している	30.6	(21.4/40.5)
	2. (必修以外の)部活動で運動系に属している	34.6	(19.0/25.2)
	3. 先生とは個人的にもよく話をする	22.0	(19.0/25.2)
	4. 欠席が多い方である	5.8	(6.6/ 5.0)
	5. 帰校時に寄り道をする人が多い	35.1	(37.5/32.4)
	6. 時々、授業をサボルこともある	14.8	(19.0/10.2)
	7. 時々、先生にイタズラをする	6.6	(7.1/ 6.0)
	8. クラスの中では発言力のある方だ	24.2	(26.5/21.7)
そ の 他	1. 暇が出来るとスポーツや趣味の時間にあてる	59.4	(64.0/54.4)
	2. 暇が出来ると家で何となくブラブラ時間を過ごすことが多い	39.8	(35.8/44.6)
	3. 時々、ゲームセンターで遊ぶ	14.3	(21.4/ 6.6)
	4. 時々、ディスコへ行く	7.7	(8.7/ 6.7)
	5. 時々、喫茶店へ行く	44.8	(44.8/44.8)
	6. 塾や予備校へ通っている	13.7	(14.8/12.4)
	7. 何となく盛り場でブラブラすることがある	8.5	(9.0/ 6.9)
	8. 友達の家へよく遊びに行く	31.4	(39.6/22.5)
	9. 時々アルバイトをする	20.0	(24.2/15.3)

を示し、高校生活において最も心的葛藤の強い学年であることを示唆している。又、睡眠時間では、7時間半以上の者に不適応感が深く、逆に少ない者(6時間以内)に不適応感を感ずる者が少ない傾向にある。

次に第2軸「成熟—未成熟」をみる(図2—(b))。第2軸の中心となる変数はフィーリング(文字—映像)と「自分がどんな人間か考えたことはない」という自己意識(未成熟)であるが、この軸は、ラジオ時間とマンガ量を除いた全ての項目と有意な関連を示している。すなわち、「未成熟」から「成熟」方向に移るに従い、勉強時間・新聞時間・単行本読書数は増加し、逆に睡眠時間・TV時間・週刊誌読書数は減少している。又、当然ながら、学年の変化も「未成熟」から「成熟」の流れに対応している。このようにみると、第2軸「未成熟」から「成熟」への変化は、学年とともに強まる受験の影響(勉強時間の増加)だけではなく、社会に対する関心の増加(新聞時間)や自我の深化拡大(単行本読書数)に対応するものであり、高校生における成長のひとつの流

れを反映していると考えられよう。

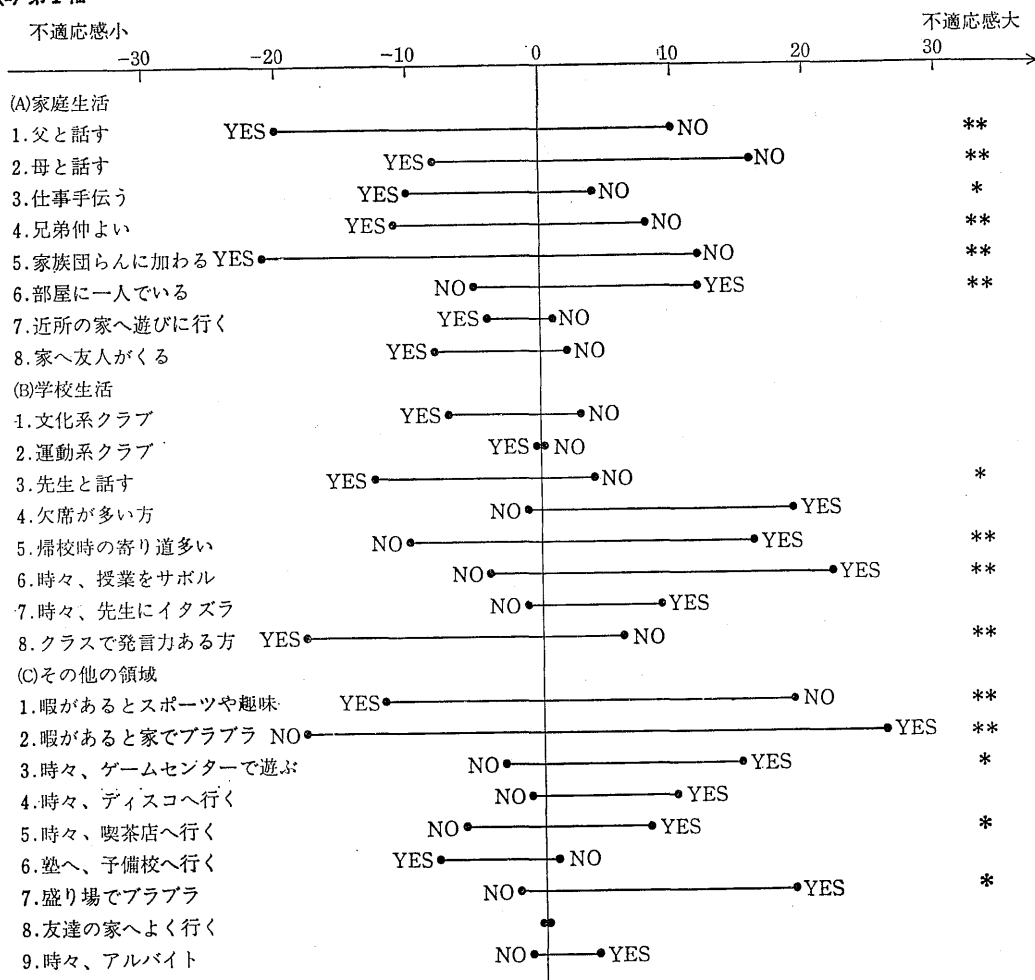
最後に第3軸「自己顕示性大小」に眼を移す(図2—(c))。この軸上で有意な差を示す項目はTV視聴時間とラジオ聴取時間であり、TV時間の少ない者、ラジオ時間の多い者がより強い「自己顕示性」を示している。この理由は明確ではないが、テレビとラジオの異なる社会的機能、あるいは青少年の側による異なる受けとり方を示唆していると考えられ、興味深い。

4. 心理変数と生活行動

続いて、心理変数と生活行動の関係を検討する。生活行動は、(1)家庭(2)学校(3)その他の3領域から成り、各項目に対する肯定回答率は表4に示す通りである。以下順に、心理変数の3軸との関係をみていくことにする。

第1軸「不適応感大小」は、家庭領域において、「近所の家へ遊びに行く」「家へ友人が遊びに来る」を除いた全ての項目と有意な関連を示す。すなわち、強い「不適応感」は、「父(母)とよく話す(NO)」「兄弟仲よい

(a) 第1軸



注) *は5%水準, **は1%水準の有意差を示す(分散分析)。

図3—(a) サンプルスコアの平均値 (心理変数第1軸×生活行動) (×10⁻²)

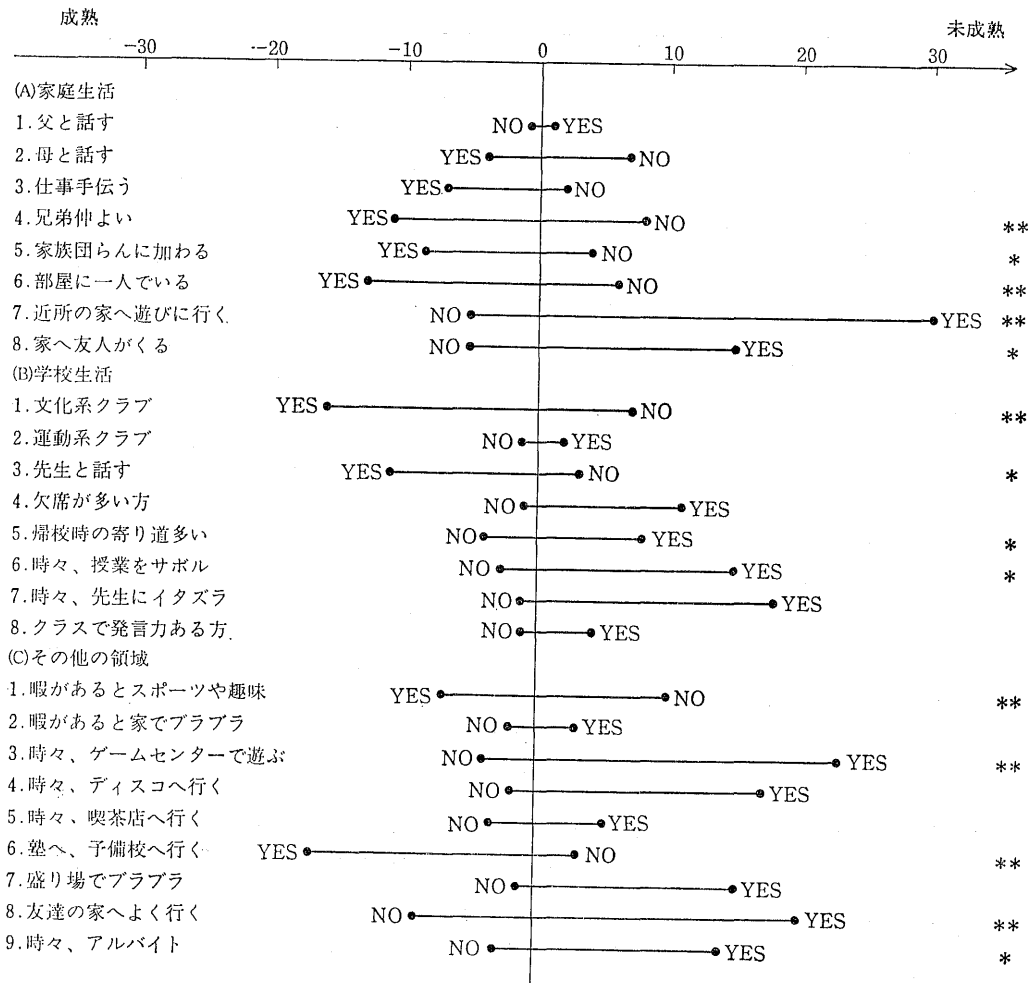
(NO)」「家族団らんに加わる (NO)」「自分の部屋に一人であることが多い (Yes)」等、家庭内における孤立傾向と結びついている。これは、前回の報告で述べた「拒否」的家庭環境の特徴である人間関係の欠如の現れという側面も考えられるが、ここではむしろ、自己の内面的世界への閉じ込めりと両親からの離脱という、青年期特有の現象のあらわれと考えられる。事実、学年的にみて、受験や就職の切迫した3年、入学1年目の1年生に比較して2年次で「不適応感」が最大になるのも、そうした青年期的特徴が2年において強まることを一因としているのではないだろうか。その意味では、第1軸の

「不適応感」は必ずしもネガティブなものばかりではない。ポジティブな面も考えられるといえよう。

学校生活に関しては、「欠席多い」「帰校時に寄り道をする」「授業をサボル」という逸脱傾向、又、その他の領域では、「暇なときは何となく家でブラブラする」「ゲームセンターで遊ぶ」「時々、喫茶店へ行く」「盛り場をブラブラする」という回答が、強い「不適応感」と結びつき、明確な目標のもてない三無主義的傾向が生活行動面における目的のなさに現れているようである。

心理変数第2軸「成熟—未成熟」についてみる(図3—(b))。まず家庭領域では、父母との話し・仕事や家事

(b) 第2軸



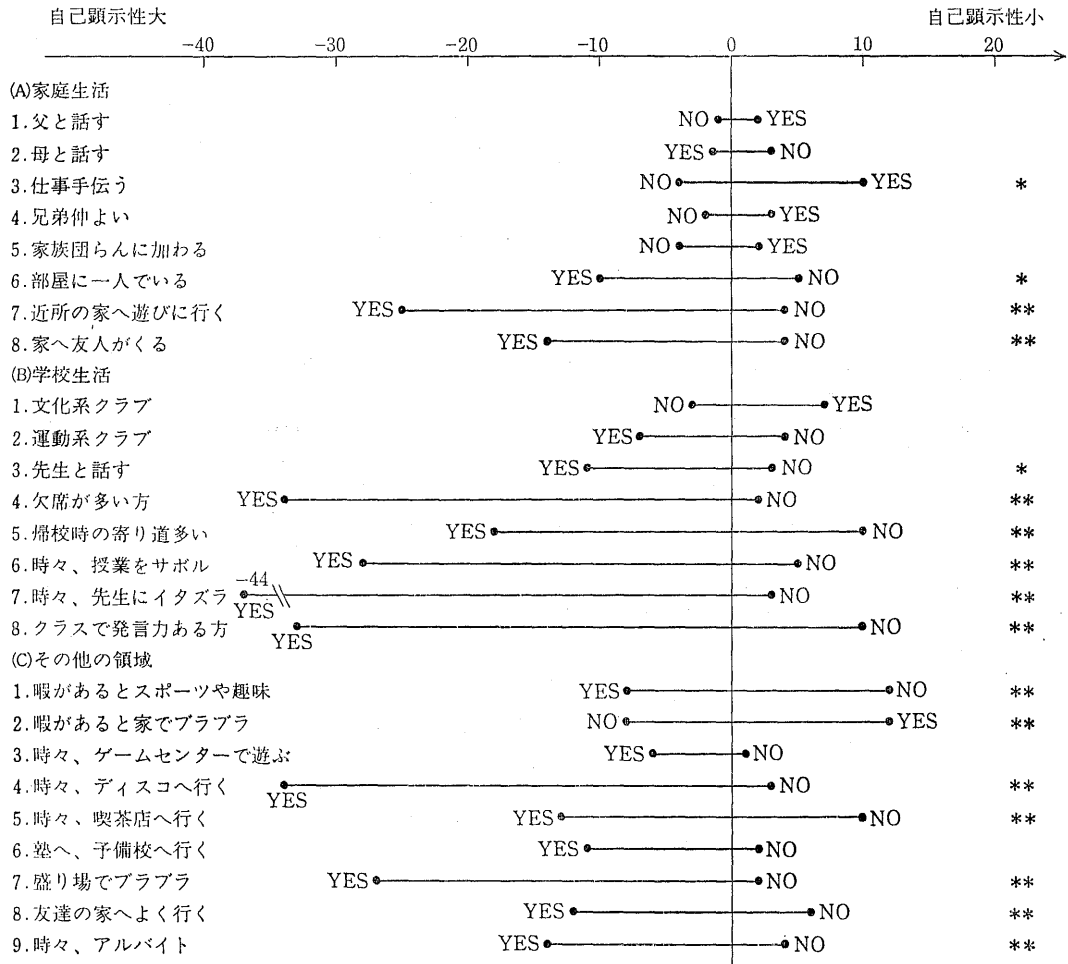
注) *は5%水準, **は1%水準の有意差を示す(分散分析)。

図3—(b) サンプル・スコアの平均値 (心理変数第2軸×生活行動) ($\times 10^{-2}$)

の手伝いを除いた全ての項目に有意差がみられた。すなわち、「兄弟仲よい」「家族団らんに加わる」「自分の部屋に一人でいることが多い」者は成熟方向に多く、一方「近所の家へ遊びに行く」「友人が家に遊びに来る」者は未成熟傾向を示した。学校生活で有意差のみられた項目については、「文化系クラブ」「先生とよく話す」者は成熟方向に多く、逆に「帰校時に寄り道多い」「授業をサボル」者に未成熟傾向が強い。又、その他の生活では、「ゲームセンターで遊ぶ」「友達の家へよく遊びに行く」「時々、アルバイトをする」者に未成熟傾向が強く、一方「暇なときはスポーツや趣味」「塾や予備校に通っ

ている」者には成熟傾向の者が多い。生活行動の面から、第2軸の「未成熟」から「成熟」へ向う多少とも特徴的な傾向を想定するとすれば、友人同士で家に行き来する。アルバイトをする。ゲームセンターへ行く、という風俗や外へ向う関心が、家族団らん、先生との話しなどのように内に閉じてくる、という点が考えられる。その分だけ、「暇があるとスポーツや趣味」「塾や予備校へ通う」というように目的が比較的明確になってくる。そして、その変化の折り返し点は、「自分がどんな人間か考える」という自己意識の変化であり、外的には、受験や就職という外的現実の影響が推測されるのである。

(c) 第3軸



注) *は5%水準, **は1%水準の有意差を示す(分散分析)。

図3-(c) サンプル・スコアの平均値(心理変数第3軸×生活行動)($\times 10^{-2}$)

最後に第3軸「自己顕示性大小」については、家庭領域で有意差のある項目をみると、「自己顕示性」の強い者は「近所の家へ遊びに行く」「家に友人が遊びに来る」「家では部屋に一人でいることが多い」傾向を示している。又、学校生活では部活動を除いた全ての項目に有意差がみられ、肯定回答が強い「自己顕示性」と結びついている。特に、「先生にイタズラをする」「クラスの中で発言力のある」者、また「欠席の多い」者にも「自己顕示性」が目立つ。その他の領域では、ゲームセンターと

予備校を除いた全ての項目に有意差が認められ、特に、「時々、ディスコへ行ったり」「盛り場をブラブラする」者に「自己顕示性」の高さが顕著である。

引用文献

堀 洋道・吉田富二雄 1980 「大都市高校生の家庭環境に関する考察」 筑波大学心理学研究 2

—1981年10月10日受稿—

SUMMARY

Relationships between Psychological Characteristics and Behaviors in Daily Life of Adolescents

Hikomichi Hori & Fujio Yoshida
The University of Tsukuba

This is the second paper from the data of Tokyo Youth Research conducted in 1979, which concerned with the influences of various environments such as home, school, neighbourhood, mass media, so forth upon adolescents. The previous paper treated (a) the structure of human relations in a family, and (b) its influences upon psychological characteristics, social attitudes, and attitudes toward sexual relations of adolescents.

The purpose of the present one is (1) to investigate the structure of ten psychological variables such as self-display, loneliness, toler-

ance, inferiority feelings, mental fatigue, dependancy ("Amae"), self-awareness, and so forth, and (2) to clarify the relationships between these psychological variables and various aspects in daily behaviors of adolescents. The main results were as follows: (1) HAYASI 3 Quantification analysis was applied to the data of ten psychological variables, yielding three axes. These three axes were interpreted as representing Feeling of maladjustment, Maturity, Self-display, respectively. (2) Scores on each axis showed strong relations to various aspects in daily behaviors of adolescents.